

## フィロソフィア - 1

25期生の皆さん、5月ももう後半にさしかかるといのに、哲学史の授業はまだ3回しかできていません。予定を見るとあと7回できるはずですが、人生には何が起るかわかりませんので、想定外なんてことを言わずにすむように対策を練っておきたいと思っています。哲学史は一年続けてもできないくらいの内容があります。そこで、現在の授業の数ではとうていカバーできないので、その不足分を少しでも補うために、このプリントを書くのです。ということで、どうか読まずにゴミ箱に捨てるとか、鼻やお尻を拭く紙にするとかなどせずに、ちゃんと読んで「哲学通信」と題したファイルに保管してください。またこのプリントは内容が少々込み入っているので、漫画を読むようには読めません。深呼吸をして、柔軟体操をしてから、静かなところで落ち着いて読んでください。

さて、哲学という言葉聞いて、「ああ、あのことか」と合点がいく人はおそらく一人もいないのではないかと推察します。かく言う私も、神父になって勉強するまでは、「哲学」とはいったい何のことか心得はありませんでした(簡単に言うと「知らなかった」ということ)。西洋では中学や高校で哲学の授業がありますが、日本には哲学の伝統がないので、これは仕方がないことだと思います。そこで、もう一度、簡単に説明しておくのも意味のないことではない(簡潔に言えば、「意味がある」ということ)と思います。



哲学という学問は、古代ギリシアで生まれたとされます。しかし、もちろん最初は「哲学」という言葉はなかった。ある人たちが「万物の根源は何か」という問題をたてて、それを理路整然と考えていこうとしたことが始まりでした。古代ギリシアの哲学の頂点にたつアリストテレス(前384~322)は、「哲学は驚くことによって始まる」と言っています。この「驚き」とは後ろから友達に脅かされて「びっくりしたな、もう」という驚きではありません。みんなは、ふだん見慣れている道ばたに小さな花が咲いているのを見て、ふと「あれ、これ意外と綺麗やんか」と感じたことはありませんか。実際、私たちの世界は、頭を使うことをせずにぼやっと毎日生活しているような人には、何の不思議も存在しませんが、君たちのように物事を注意深く観察する人には不思議なことで一杯です。だいたい、私たちやこの世界が存在すること自体、不思議だとは思いませんか。または、この世界が、私たちの見ているように存在していることも不思議ではないでしょうか。別の仕方でも存在することもできたはずなのに、どうしてこんな風に存在しているのだろう、と。驚いて、次になぜと問うのが、哲学の始まりなのです。なぜと問う代わりに、その感動を何とか表そうとするのが芸術家です。

いずれにしても、古代ギリシアに「万物の根源は何か」と問うことを人生の重要課題だと思った人たちが出た。このような人を見て、「なんや、何の役にも立たへんことを一生懸命にやってはる。変わったお方や」とせせら笑う人もいたが、他方、「彼らはお金のためでも、名誉のためでも、快樂のためでもなく、ただ真理を知りたいという態度で学問をしている。あの人たちのしていることは智恵(sophia)を愛する(philo)ことだ」と感心して、この営みを philo-sophia と呼ぶ人もいた。この言葉が明治時代に「哲学」と訳されたわけですが、と先日言いました。(ついでながら、上智大学とは英語では Sophia University と言います。上智というの、カトリックでは最も気高い智恵のことです。また日本語で博愛と訳されている言葉は、philanthropy ですが、これも anthropo(人間)を(philo)愛するといいい意味です)。

かくて古代ギリシアで一流の賢人たちが約2世紀の間、「ああでもない、こうでもない」と考え続けていくうちに豊かな思想が蓄積されて、紀元前4世紀にプラトン(前427~347年)とアリストテレスという人によって体系づけられた学問が生まれました。これをギリシア哲学と言います。(言うておき

ますが、哲学はここで完成したのではありません。哲学（根源を求める営み）は果てしのない営みですから、これは貴重な人類の遺産の一つで、後の西洋の学問はここから生まれ、また西洋の思想の歴史はこのギリシア哲学とキリスト教の教えの上に、時にはそれらの延長として、時にはそれらに反発しながら、展開していくのです。そして、この思想の影響は、良きにつけ悪きにつけ今では全世界に広がっています。

では、哲学とは何を勉強するものでしょうか。ある学問がどんな学問かを定義するためには、二つの点を見る必要がある。一つは「何を勉強するか」。もう一つは「どんな視点から勉強するか」です。例えば、歴史も医学も人間を研究しますが、歴史は人間が過去にどういうことをしたかに焦点を当て、医学は健康という点から人間の体と心に焦点を当てると言うふうに、第一の点（何を勉強するか）は同じでも、第二の点が変わると別の学問になるのです。さて、第一の点に関しては、先ほど言った「哲学は万物の根源を探し求めることから始まった」というところに答えがあります。すなわち、哲学は万物、すべてのものを対象とする学問です。「でも、すべてのもの」ってなんでしょう。すべてのものとは、「存在するものすべて」のことです。「存在するもの」の外には何も無い。「無」は存在しません。それゆえ「無」について考えられないのです（先日見たパルメニデスが主張したこと）。

ここが哲学の変わっている点で、みんなはきっとここに引っかかると思います。というのは、今までみんなが勉強してきた学問は、すべて個別学問といって、「存在するものすべて」ではなく、たとえば物理なら「物質を持つもの」、生物なら「生命と関係のあるもの」、歴史なら「過去の人間の営み」というふうに対象を限っているのです。別の言い方をすると、物理では「物質を持たないもの」、たとえば言葉、思想などを研究の対象にしません。歴史は直接には物質の構造や法則を研究しません。それに対して、哲学はすべてを考察の対象にするのです。

第二の点、「どんな観点から勉強するか」を問うなら、哲学は「すべてのものを、最も本質的な面において考える学問」と言うことができます。個別学問は、いくらかの前提から出発するのですが、哲学はその前提を問題にするのです。たとえば、歴史は「過去の人間の営み」を探っていくのですが、この場合、基本的な前提は「人間とはなにか」という問題です。しかし歴史はそれを考えないままに研究を進めます。そこで、「人間は自由な存在だ」と考える歴史家と、「人間は物質であって自由ではない」と考える歴史家がいる、それぞれの信念に従って歴史を解明しようとするので、同じ事実を解釈する場合もその結論は大いに異なることがあります。だからまず「人間は自由なのか、そうでないのか」という問題をはっきりさせておかないといけないのですが、それは哲学がすることなのです。

哲学が、全体を最も本質的な面において説明しようとするものということは、逆に言うと、哲学はすぐに何かに役に立つものではないということです。例えば、ロケットを作って惑星に到着させるためには、哲学をしてもだめで、物理学を勉強しないといけません。だから大学で哲学を勉強しても就職がほとんどないのです。でも、哲学をすることは、世界と人間の何たるかを考えることになります。古代ギリシア時代から現代までにどんな人がどんなことを考えたのかを知るのには、君たちの人生観や世界観を作るために、また色々な考えを整理するのにも、あるいは誤った軽薄な思想に汚染されないためにも役に立つと思います。

そんなわけで、一緒に考えながら授業ができればと思っています。積極的に参加してくれることを望みます。ではまた。



念のため、これは私ではありません。ソクラテスの想像図です。